2歳児の発達と親による日常的な歌いかけの関連

―音楽、言語、社会性の発達についての検討―

梶川祥世[1]・森内秀夫[2]
([1]玉川大学リベラルアーツ学部・[2]ヤマハ音楽振興会)

【目的】

音楽は多くの人々にとって日常生活に深く関わるものである。乳児期から音楽に接することにより、音楽に対する知覚・認知、行動や感情などの反応が発達するが、さらに音楽以外の領域の発達も促進されることが議論されてきている（Corrigall & Trainor, 2011）。本研究は、音楽教室において定期的に音楽に触れる経験が、乳幼児期の発達にもたらす影響について明らかにすることを目的とした。まず音楽教室に通う幼児と通っていない幼児のあいだで、家庭での音楽聴取や歌いかけなど親から子への働きかけの量の差を調べた。次に、音楽に対する反応と、言語、運動や社会性など音楽以外の領域の発達について、両群で比較を行った。さらに、親による家庭での歌いかけ頻度と子の発達との関連について検討した。

【方法】

対象：音楽群として、音楽教室に通う幼児 172 名（*M* = 2;3, *range* = 1;2-2;10）、統制群として習い事に通った経験のない幼児 354 名（*range* = 1;11-2;10）を対象とした。いずれも両親と同居の第一子である。
手続き：音楽群は、音楽教室にて保護者に質問紙を配布し、記入を依頼した。統制群は、インターネットを通じて条件該当者に協力を依頼した。調査時期は 2012 年 2～3 月であった。
質問項目：家庭での音楽環境として、「音楽聴取頻度・時間」「音楽の種類」「聴取手段」「養育者による子への歌いかけの頻度」を尋ねた。音楽発達評価に関して、「乳幼児音楽行動の発達プロセススケール試行版」（谷村, 2010）より「聴く」「動く」「歌う」の 3 領域について、第 6・7 段階（1;6-3;11）の各領域 3、2、5 項目、計 10 項目を質問した。また全般的な発達評価のために、発達検査項目（KIDS 乳幼児発達スケール）より、「運動・操作・理解言語・表出言語・概念・対子社会性・対成人社会性」の 7 領域について、2;0-3;0 の範囲で抽出した各領域 7 項目、計 49 項目を質問した。
分析：得られた回答から子の年齢を 1;11-2;10 に絞り、3 ヶ月ごとに年齢群としてまとめ集計した（音楽群 117 名、統制群 302 名）。発達検査項目と音楽発達評価は、各領域の合計得点を算出した。

【結果と考察】

「音楽聴取頻度」「養育者による子への歌いかけ頻度」ともに、すべての年齢で「ほぼ毎日」と回答した割合は、音楽群が統制群よりも高かった。音楽発達得点は、「聴取」「動作」「歌唱」の 3 領域すべてにおいて、2 歳 0 ヶ月（1;11-2;1）で音楽群が統制群よりも高かった。また「歌唱」のみ 2 歳 3 ヶ月（2;2-2;4）でも音楽群が高い得点を示した。発達検査項目の得点は、2 歳 0 ヶ月で 7 領域すべてにおいて、音楽群が統制群よりも高かった。さらに「表出言語」「概念」「対子社会性」は 2 歳 3 ヶ月、「操作」は 2 歳 3 ヶ月および 2 歳 6 ヶ月（2;5-2;7）、「理解言語」は全月齢において、音楽群が高かった。

また、養育者による歌いかけ頻度のばらつきが大きい統制群において、年齢ごとに歌いかけ頻度の高い群と低い群とにわけて発達得点を比較した。この結果、歌いかけ頻度の高い群は低い群よりも、言語、社会性、音楽の発達得点が高い傾向がみられた。

以上のように、音楽教室に通っている子どもは習い事をしていない子どもに比べて、家庭でも日常的に音楽に接する頻度が高いことが示された。また発達に関しては、特に 2 歳 0 ヶ月において音楽群と統制群の差が大きく、比較的早い時期から音楽教室という習い事に通う経験が、音楽に対する反応のみならず、全般的な発達にも影響をもたらす可能性が示された。ただし、これには育児や教育に対する保護者の意識も大きく関与すると考えられ、外部での経験のみによるものとはいえない。習い事に通わない家庭のうち、養育者からの歌いかけ頻度の高い群では一部の発達得点が高い傾向があることから、親子のコミュニケーション量の多さが直接の要因のひとつであると考えられる。

今後、子どもに歌いかけをする、親子で一緒に歌うなど、音楽を家庭の生活に取り入れることで親子のコミュニケーションがどのように活性化されるのか、またそれが音楽教室に通う経験により生じるものなのか否かについて、さらに追究していくことが必要である。